

京口門だより No. 6

桜の開花は寒かった冬のわりには、例年どおりに咲きはじめました。「雀来て障子にうごく花の影」(夏目漱石)。桜の時期はこぞって花見に出かけますが、屋内で静かに桜をながめるのも良いのではないのでしょうか。

桜の樹の皮を漢方薬として使うというのは、日本独特の使い方です。有名な十味敗毒湯という漢方薬の中に使われています。この漢方薬は江戸時代に紀州(和歌山)で、世界に先がけて麻酔をかけて外科手術をおこなった華岡青洲が作った薬です。古い漢方医学では外科が皮膚病の治療をおこなっていました。この十味敗毒湯は化膿性皮膚病、いわゆるオデキの初期に使われ、膿を発散させて治るのを早めるのに使われます。最近はいわゆるオデキというものをあまり目にすることはありませんが、昔はひどいオデキである癰(よう)とか癩(せつ)といった皮膚病で亡くなることもありました。抗生物質が使われるようになり、激減してゆきました。それでは十味敗毒湯は不要な薬となったかといえば、ごく初期のオデキに使いますと非常に早く治ってしまいます。そしてオデキのような皮膚病だけでなく、じんま疹やアレルギー性皮膚炎などにも使うことがあります。十味敗毒湯はこのように代表的な皮膚病の薬と言えます。

漢方治療の得意な分野のひとつに皮膚病があります。アトピー性皮膚炎は今日の皮膚科では、ステロイドによる治療が主だったものであり、それ以外の治療をおこなっても治らないという皮膚科の先生もいます。しかし、ステロイドの治療でも治りにくいアトピー性皮膚炎も相当あり、漢方治療と食養生や生活改善によってすっかり良くなってゆく方もあります。その人の病状に対応して様々な漢方薬を用いてゆきます。漢方治療はただ炎症を抑えるだけでなく、皮膚の機能をよくして再発しないようにすることができます。漢方治療でアトピー性皮膚炎が良くなった人は、すっかりもとの正常な皮膚に変わってゆきます。慢性のじんま疹も漢方治療で大変よくなってゆきます。これもじんま疹の痒みを抑えるだけでなく、起りにくい皮膚に変わってゆきます。さまざまな現代医学の治療を受けても治りにくい皮膚病は、いちど漢方の治療を試みてほしいと思います。また漢方は皮膚の美容にもよいとよく言われます。長く漢方薬を飲んでいると、女性ではお化粧ののりが良くなったとか、肌がしっとりとしてきたなどと言う声を聞きます

